

私の幼児教育論 X

神 沢 良 輔

三 保育の基本 (八)

—— 幼児とのかかり合いの中で ——

(X) 保育者は、すべての幼児たちの活動のみられる位置にいる

(1)

保育者がいるということで、幼児たちは安定して活動にとりくむことができるし、それを通して発達していく。

それは、これまでみてきたように、ひとりひとりの幼児は、保育者に自分自身を受容されたいと願っているからであるし、受容されることによって安定していくことになるからである。

また、安定しているということにより、幼児は自己を表現すると

いうことが可能になり、集中して活動にとりくみ、それによって発達するということになる。

そのために、保育者は、ひとりひとりの幼児と、いつでもかわりのもてるように、自分のいる位置について、常に留意する必要がある。換言すれば、保育者は、すべての幼児たちの活動しているようすが見やすい場所に位置するように常に留意することがたいせつであるということになる。といっても、それは特定の場所があるというわけではなく、幼児たちの活動の状態によって異なることはいうまでもない。

つまり、幼児との朝の出会い、幼児たちが自ら選んだ活動にとりくむとき、活動が広がっていろいろなコーナーに分かれたとき、さらにそれがテラスや室外にまで拡大したとき、また学級全体の活動が中心になったときなどさまざまであろう。

しかも、実践の具体的な場においては、毎日毎日のようすが必

ずしも一定しているわけではないし、また、一日の保育の流れの中でも、またもつと短い時間をとつても、それは時々刻々と変化しているであろうし、ときには瞬間的に変化することだってあるだろう。

だから、いうまでもなく、¹¹すべての幼児たちのみられる位置にいる¹²といつても、それには決った場所があるというわけではもちろんない。それは、保育者が幼児たちとの保育の実践の具体的な場において判断するということになる。

(2)

保育者の位置については、私のような幼稚園への闖入者にとっては、誠に気になることであった。

それは、ひとつには、自分自身が保育室において占める位置がわからないということのためでもある。つまり、幼児たちの活動のようすはみたいのであるが、私が入ったことで保育の邪魔になったら申しわけないし、どこに位置していたらもつともよいかかということ、いつも迷うということのためである。

だから、私にとっては、幼児の活動の全体のようなすを一べつとすると、すぐ保育者がどこに位置しているかということのみをつける

ことが、たいせつなことになるのである。といつても、私自身の判断のあまさから、実際には保育の邪魔になったことの方が多いのであろうが、気をつけて、自分の占めてもよいと思われる空間をさがしたということだけは、了とされたいということになる。

でも、幼児の活動をみていると、逆に、保育者の位置に疑問をもつことも、ときにはあるのである。

(3)

そこで、これらのことについて、もう少し具体的にみていきたい。

まず、朝の出会いにおいては、保育者はひとりひとり幼児を出迎え、人間関係に入るために、幼児が登園してきたとき、登園した幼児と目があうとともに、幼児が保育者のいることが確認しやすい位置にすることが望ましいだろうし、出合いの終わった幼児たちの、毎朝くり返される、基本的な生活習慣の状態——下靴と上靴のとりかえ、かばんの整理、通園服と作業服のとりかえ、手洗い、うがいなど——も見え、出合いが終ってコーナーで活動している幼児たちや、運動場にいる幼児たちの活動も見える位置が望ましいということになろう。また、このように出合いのときは、

できるだけ場所をかえずに、ゆったりした感じが幼児にも通じるようでありたい。それは、登園直後ではコーナーや運動場にいる幼児たちは、本気になって活動にとりくんでいるが、大部分の幼児たちは、保育者との関係や承認を求めて、自分のしたい活動を模索しているという状態にある幼児も多いのであるからである。

だから、保育者の位置が変わり、保育者の姿がみえないと、ときには安定感をなくし、保育者のいるまわりへきたり、活動への集中性がなくなったりして、それがクラス全体にも影響を及ぼして、全体が不安定な行動になる場合も多いということでもある。

また、落ち着いて出会いできるためには、前日に必要な環境の準備をしておくとともに、出会いの最中に準備不足のために不意に動くということのないようにしておく必要がある。朝の出会いのとき、保育者が動くことによつて、そのあとの一日の保育全体が失敗したという例は余りにも多いのである。

(4)

幼児たちがコーナーにわかれたり、運動場で活動するというときの保育者の位置については誠にむずかしい問題が多い。

コーナーでの活動の指導では、できれば、すべてのコーナーの

活動について、見てあげることはよいことであるし、コーナーで、幼児とともに活動することはもっとよいことである。できれば保育者は、参加しないコーナーのないように心がけることもたいせつである。

しかし、この場合もっともたいせつなことは、すべての幼児たちの活動が見られる位置に坐つて、コーナーの活動に参加するということである。もちろん、このような場を占めようと思つても、その場所で幼児たちが活動していたりして必ずしもうまくいかない場合もある。そのような場合には、幼児の動きを見ながら、望ましい場所へ機会をみて移れるようにすべきである。といつて性急に場所を移動することは、コーナーにいる幼児たちの雰囲気悪い影響を与えることも多いので、十分に留意する必要がある。

また、ひとつのコーナーから他のコーナーへ移る場合でも、保育者のいるコーナーの幼児たちに、安定感をもって活動にとりくめるようにしてから、ゆっくり、次に予定しているコーナーに移るようにすることがたいせつである。そのためには、一つのコーナーに原則として二十分ぐらいいはいるようにするとともに、移る機会を見落さないようにする必要があろう。

保育者が別のコーナーに移った場合に、前にいたコーナーの幼

児たちの活動の水準が低下したり、保育者の移ったコーナーに追っかけてくるというようでは、移り方に問題があったということにならう。

(5)

幼児たちの活動は保育室だけでなく、当然運動場へも拡大していく。そして、保育者にとって、「すべての幼児たちの見える位置にいる」ということは、物理的には不可能になってくる場合もでてこよう。

こうなると、保育者にとっては、保育室か運動場か、または、その他の幼児の多くがいる場所かのどこにいるのが最もよいかという判断に迫られることになる。これは、保育者にとって、もっとも大きな決断を要する事態である。でも保育者は、どこへ動くにしても、やはり「すべての幼児の見える位置にいないてはならない」ということになる。

それは、保育者が現実によつての幼児に見える場所になくても、いるのと全く同じような状態を維持するということである。そのためには、保育者は、ひとつの幼児たちのグループから離れるときには、行先をそのグループの幼児たちにはつきり知ら

せておくとともに、必要があれば、離れなければならない理由を幼児たちに納得させておくべきである。またこのようなことは、いかに忙しくても必ず実行すべきである。

“先生は、〇〇にいるからね”と行って、別の場所に移動すれば、そこにいる幼児たちも、そこに行けば保育者がいるということとで、安定して活動にとりくむことができるであらう。

また、活動が拡大していくと、保育者の見えない所で活動する幼児もでてくる。ときには、保育者から見えない秘密の場所でのびのびと活動することにより、満足したいという要求も幼児のなかにはみられる。だから、保育者は、このような、保育者の見えない所にいる幼児の活動についても、そこで何がなされているかということについて、心の眼を通して見えるようになることがたいせつであるし、そこにいる幼児たちの活動についても理解してやることがたいせつである。

このように、実際の保育においては、いろいろの問題はあるにしても、現実には見えない幼児の活動をも含め、保育者は、すべての幼児の活動の見える位置にいないてはならないということにならう。

つまりは、保育者は、ひとりひとりの幼児と、見えない心の糸で結びついているなければならないということになる。(暁短期大学)